

失礼します。香川県立ミュージアムの上野といいます。座って失礼させていただきます。

今日は「西行と善通寺」ということで少しお話をさせていただこうと思っています。私のほうは県立ミュージアムで中世専門の学芸員として調査とか研究、展覧会等といったものをさせていただいています。西行を扱うっていうのは、崇徳上皇との関係で必ず出てくるので勉強したりはしますけれども、いかんせん和歌のほうはそんなに得意ではないので、（西行は）歴史学と国文学とどちらにも係わっている人物なんですけれども、私のほうはどちらかというと古文書とか古記録を中心に研究をするものですから、どうしても和歌は飛ばして読んでしまうタイプなんです。今日は後半、西行さんの和歌も少し取り上げたいと思っているんですけれども、やはり細かいところを訳するというよりは、「どれくらい分量があって…」という、ひとつ「和歌を史料文として見たときにどうなのか」といったことをお話しできたらなと思っています。

現在は私、ミュージアムのほうで学芸員をしておるんですけれども、3年ぐらい前までは香川県庁のほうで四国遍路の世界遺産登録に向けた取り組みをしておりました。結構長くて8年ぐらいしていたなかで、いろんな札所のお寺の調査をしてきました。もちろん四国遍路は弘法大師・空海さんの足跡をたどる人たちが礎を築いてきたというものですけれども、そういう意味では、西行さんも善通寺に来たことは間違いないので、一遍上人とか西行さんとか鎌倉時代のかなり全国でも知られた偉いお坊さんたちが訪ねてきて、それで空海さんのあとを偲んで修行をするというのがかなり大きなことだったのではないかなと思っています。白峰山とか五色台に登っても西行さんの足跡があったり、ここ（善通寺）の近くでは曼荼羅寺さんとかでも西行の昼寝石の歌碑があったりですね、もちろん、どこまでが本当の話なのかっていうとなかなか難しい面もあるんですけれども、ただ、やっぱり西行さんが実際に来ていることは事実なので。

本当に歌人としては巨人というか超有名な、やはり日本の文化史を考えるうえで西行さんっていうのはかなり大きな名前ですので、その方が善通寺にも来ていたっていうことはやっぱり考えておく必要があるのかなと思っています。例えば江戸時代に、松尾芭蕉が西行さんを非常に敬愛していたとか、後世に残したインパクトっていうのもかなり大きいんだなと。それで、江戸時代までのことは比較的、善通寺の話とかっていうのはわかるんですけれども、中世の源平合戦くらいになるとかなり昔の話ですので、史料で迎えることは少ないんです。少し想像もたくましくしながら見ていけたらいいかなと思っています。

今日の資料は、画像（壇上のスクリーンに投影）のほうはちょっとおまけ的に使う程度で、この紙資料を使いながら進めていきたいと思っています。

「はじめに」ですけれども、資料のほうで西行が「1118-1190年」という、あとで年表でも取り上げますけれども、結構長寿で、73歳まで生きておられます。平安時代末期から鎌倉時代初期の歌人なんですけれども、本当にこれ源平合戦のさなかのような、非常に激動の時代の方なんだなということです。桜とか月とか恋などを主題に、心の思いを率直に表現した歌を詠んだ方として知られています。花鳥風月を愛でるっていう日本人のある種理想的な文化人の姿。それから、そこにも書きましたように「東北から四国までを旅して漂泊の人生を送った」と。うらやましいな、と思うかもしれませんが、迂闊に世捨て人になると大変なことになりますので。あとでもふれますけれども西行さんは結構裕福なんで、経済的にはとても恵まれています。そういう方じゃないと、迂闊にこれ、脱サラでもしてしまったらなかなか大変な生活になりますので注意して

いただくと。それから、高野山や伊勢などにも住んで各地に伝説を残しています。西行の歌は歌集の『山家集』が最も著名なんですけれども、全部で二千余首くらい伝えられています。先ほども言いましたように「日本文化のさまざまな場面に足跡を残している」と。西行を慕う追随者は絶えない、といったことは中世以降も言えるのかなと思います。

今日は地元の方も結構多いと思うんですけれども、多分「西行と善通寺市」と言ったときにぱっと浮かぶのは、（スクリーン：西行庵の石碑）この西行庵のようなものですね。私も最近行ってきたんですけれども、曼荼羅寺から出釈迦寺に上がっていくところで、ミカン畑のようなところを少し入っていくと、いわゆる「水茎の岡」の西行庵というところに出ます。建物は復興されているので、これはだから「八百弐拾年祭（再建二十周年）記念」の石碑ですね。（スクリーン：西行庵）これが当初の西行庵があったといわれる場所に復興された建物です。再建当時の写真などを見るとびかびかで、新しいんだなっていう感じなんですけれども、今はもう大分馴染んで、雰囲気の出てくる感じかなと思います。（スクリーン：西行庵からの眺望）今は配水池の工事をしている前方が見えないこともあるんですけれども、風光明媚なところで、遠くに瀬戸大橋なんかも見えるような場所になっています。ただ、本来西行さんのいた場所っていうのは、やっぱりもうちょっと高いところに在ったんじゃないかと。火上山に向かってちょっと行った中腹にあるので、江戸時代は多分ここかなと思うんですけれども、さらにもっと高いところに庵が在ったんじゃないかと言われる方もいらっしやいます。

（スクリーン：江戸時代の善通寺略図）江戸時代の文政くらいですから、かなり終わりの頃なんですけど、善通寺の略図といわれている絵図があって、結構これよく描けている絵です。こちら、いわゆる西院（＝誕生院）のほうから五岳山を望んで見ているんですけれども、一番手前の「八幡山」っていうのが、これはもう今は駐車場になっているので崩されてしまっているんですが、「香色山」であったり「筆ノ山」であったり「我拝師山」であったり、「中山」とあって「火上山」というかたちで五岳山があると。実際はこんなきれいに並んでは見えないのかもしれませんが、我拝師山のところに「捨身ヶ嶽」があって、もともとこちらが行場というか、空海さんの修行したところなんですけれども、四国遍路などを調査しているところはなかなか登るのが今でも大変なところ。「それではやっぱり庶民が困るやろう」というので、その中腹に出釈迦寺が、江戸時代の半ばくらいですかね、元禄くらいに出来ていきます。それで、その下に曼荼羅寺があって、曼荼羅寺からちょっと入ったここに、「水茎の岡」っていうのが載せられています。位置もこれくらいでいいんじゃないかなと思うんです。ですから、江戸時代にはここが、西行さんの庵があったところだと言われていた場所なんだと思います。捨身ヶ嶽は、名前のとおり弘法大師・空海さんが身を投げようとして、そこに師である釈迦如来が天女とともに現れて空海さんを救ったと。「われが師と拝するような山」だということで、我拝師山と言われていたところなんです。

資料に戻っていただくと、「西行の伝説化」と書いているんですけれども、これはかなり早くから行われているようです。高野山の高僧である道範っていう人が、高野山の内部抗争で流罪にあってしまうと。それで四国に、讃岐の国に流されてくる人物なんですけど、この道範さん、高野山のトップクラスのお坊さんとして、讃岐にいたときの様子をかなり克明に記録してくれています。日記風を書いてくれているんですが、それが

『南海流浪記』という史料として、なかなか良い史料です。

寛元元年（1243）の記事として善通寺のことも書いているんですけども、その中の一節で「十月之頃、南大門ニ出テ、南方ノ名山等眺望ス。南大門ノ前ノ路、弘サ三丈五尺、長八町。左右ニ率都婆（そとば）多ク立之。其門ノ東脇ニ古大松（古い大きな松）アリ、寺僧云、昔西行、此松ノ下ニ七日七夜籠居シテ、久に経てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人もなき身ぞ ト詠メルニヨリテ、此松ヲバ西行ガ松ト申也ト申ヲ聞テ、云々…」というふうにあります。これが本当かどうか、要は「南大門の東の脇に古い大きな松があるんです」と。「お寺のお坊さんが言うには〈これは昔、西行さんがこの松の下に7日7夜こもった場所なんです。そこでこんな歌を詠んでいます。ですので、この松を西行ガ松というふうにわれわれは呼んでいるんですよ〉」というような話になっています。この寛元元年（1243）というのは、西行さんが善通寺を訪れて80年後くらいなんですけど、この当時、西行庵ってどこに在ったのかっていう話なんです。先ほども見たように、江戸時代には捨身ヶ嶽とか曼荼羅寺から少し入ったような、その付近にあったんだろうと。和歌を見てみても多分それくらいかなと思うんですけども、この話では善通寺の南大門なんで、すぐ平地の、いわゆる西院・東院でいうところの東院の、あの古い伽藍のところのすぐそばに西行さんの松があるんですよという話。これは一概に本当かうそかって言ったらわからないんで、西行さんが実際そういうことをされたのかもしれないけれども、恐らくこれは当時の善通寺の由緒を作りたい、名所を作りたいっていう思いから出てきた話なんだろうと思います。もう、西行さんが訪れて80年後には、既に西行庵と松が南大門のすぐ近くにあるんだと語られていると。

ご存じかもしれませんが、いろは会館からちょっと道を入っていくと「玉泉院」という場所があります。（スクリーン：江戸時代の善通寺略図）この江戸時代の地図にも出ていて、ここに五重塔がある。これ、五重塔がないのにサービス精神で描いちゃうとかよくあるんですけども、これが本当に文政年間だと五重塔があって、もうしばらくすると天保年間に焼けちゃうんです。ですから、これは江戸時代後期の一番善通寺が栄えた頃の絵だと思っんですけども、南大門、これは復興されていないんでその「跡」としか書かれていないんですけど、ここから入っていくと「玉の井」っていうのがあって、これは今も在ります（現在の玉泉院か）。その横に「西行庵」っていうのがあって、ここに松が生えています。と、というのが江戸時代から既に。だから、南大門からちょっと入ってくるんですけども、引き継がれていって、平地で、善通寺の伽藍に近いところに西行さんのゆかりの場所を探すと、やっぱりここになってくるということです。『南海流浪記』（1243年）の記事がそっちのほうに発展していったんだろうと思います。

（スクリーン：『善通寺伽藍并寺領絵図』）鎌倉時代の後半に、境内とかその周辺の寺領を描いた絵図が残っています。これは重要文化財なのでご存じの方も多いと思います。これを見ると、これは南が上になるように描かれているんで、われわれの感覚とはちょっと逆ですけども、皆さん（配布資料の）11ページを見ていただくと、そんなに大きくはないんですけども一応写真を載せています。この時代も五重塔がないんですけども、ただ、金堂が結構大きくある時代なんです。南大門は、これも再建されていないんですけど、この部分に大きな松が、こんなに大きくていいのかっていうものもありますけども描かれています。これが南大門近くの松だということであれば、先ほどの『南海流浪記』から若干時代が下っていると思いますけども、これが多分、西行ガ松の意味で描き入れたものだと思います。ですので、ここ（善通寺）から玉泉院っ

てそんなに離れているわけではないですけれども、この松の後継が、いわゆる現在の玉泉院の西行庵であったり松なんだろうと思います。

（スクリーン：玉の泉（玉の井））この小道から入っていくと、玉の泉っていうのがあって、由来が書かれている。「岩にせく関伽井の水のわりなきは心すめどもやどる月かげ」っていう、これを西行さんが詠んだと伝えられているんです。なかなか美しい歌なんですけれども、西行さんが本当に作ったかっていうのは確定してなくて、現段階では西行さんの作とは認められていないものなんですけれども、そういう伝承は残っていると。

（スクリーン：玉泉院）玉泉院さんはこういう場所ですけども、（スクリーン：玉泉院の西行庵）西行庵というのがあって、（スクリーン：玉泉院の松（久の松））これが松なんですね。また行って、ご覧いただきたらと思いますけれども。

ですから善通寺のこの付近には、もっと本当は西行さんゆかりの場所ってあったのかもしれないですけども、「二大西行さんの跡」としては、先ほど言った曼荼羅寺からちょっと入っていく西行庵と、この善通寺伽藍に近い玉泉院の西行庵であったり「久の松」っていわれているこの松、大きくは二つあるんだということを知っておいていただけたらと思います。実際、西行さんは来ておられるので、西行さんがこもった場所っていうのは本当にあったのかもしれないので一概にうそとも何とも言えないんですけども、ただ実像と伝説と、もちろんそのさび分け（方言で、「選別する」の意。）をする必要もあります。ただ、伝説が実際にはなかったんだっていう話だけじゃなくて、それが作られていくような背景とか、少しトータルで評価しておく必要はあるのかなというふうに思います。

こういった西行伝説が中世以来ずっと作られていくんですけども、その元になったと考えられているのが資料に書きました西行の伝記『西行物語』とか、それを絵にした『西行物語絵巻』っていうものです。既に鎌倉時代から作られていました。それから、語り手を西行に仮託した説話集『撰集抄』というもの、これは西行さんがいろんな場所を見聞して、それを記録したものなんです。『撰集抄』は結構長く西行さんの作だと信じられていたんですけども、これはちょっと西行作ではないと現在では固まってしまうので、いわゆる説話のたぐいなんですけれども、ただ、これらは鎌倉時代から読まれて「漂泊の歌人」西行伝説の原型となっていることも事実です。

この説話集『撰集抄』の末文の結びに、いろんな諸本もあるんですけども、大体次のようなことが書かれています。「時に寿永二年むつきの下のゆみはりに、讃州善通寺の方丈の庵にてしるし終りぬ」とあって、寿永2年というとこれはもう源平合戦の真っ最中で、1183年の年記なんですけれども、善通寺でこれを書きましたというようなことが載っているんです。ただ、西行さん自身は治承4年（1180）には伊勢に庵を結んでいるので、これはやっぱり西行さんが寿永2年に善通寺で『撰集抄』を書いたということは本当ではないと言わざるを得ないんですけども。ただ、この『撰集抄』という本が、西行作とするに最もふさわしい場として善通寺を選んでるっていうことの意味は、結構大きいのではないかと思います。西行さんは奥州、東北にも行っているし、伊勢にも行っているし、西国もいくつか行っていますから、別にそこでもいいわけなんですけれども、あえてこの善通寺を選んでる。それが多分、中世の人々は納得して受け入れたんだろ

うということであれば、やっぱり善通寺の存在っていうのが西行とセットで中世の人は考えていたし、やっぱりこの場所が特別な場所という認識があったんだっただろう、ということは言えるのかなと思います。

ということで、実像ということに少しこだわるならば、西行の生涯をやっぱり一通りは、簡単にですけれども辿っておく必要があるのかなというのと、文献資料ではなかなか西行さん、足跡はわからないので、実際に詠んだ和歌から西行さんの四国へ入るコースであるとか、善通寺周辺での活動を少し見ておきたいというのが今日の講演の趣旨ということになります。和歌は基本、『山家集』を使いたいと思っています。配布資料の2ページに移っていきます。

西行の生涯を年表としてまとめておきますと、数えの1歳から始まって73歳で亡くなるまでということになります。順に見ておきますと、1118年(元永元)に生まれています。平将門の乱っていう、いわゆる「将門と純友の乱」のようなかたちで言われますけれども、この平将門の乱の平定などで有名な鎮守府將軍の藤原秀郷という、依藤太とも言われますけれども、の9代目の子孫で、曾祖父の代から「佐藤氏」と称していません。父は左衛門尉康清っていう人です。母は監物源清経の女(むすめ)とされています。俗名は佐藤義清。ヨシキヨと書いてノリキヨって読ませているわけですがけれども、これは別名、別の字を当てるときに憲法の憲とか、規則の則とか、あと範囲の範って書いていますので、恐らくこれでノリと読ませたんだろうと言われていています。出家して円位、これは結構あとから円位と使っているようですがけれども、基本は西行といたり、大本房とか大宝房とかのように房名と呼ばれたりもしています。徳大寺実能の家人、従者のようなこともしています。ですので、基本的には武士ですね。

佐藤氏自体は代々衛府に仕える武門の家で、故実にも明るく、紀伊国=和歌山県の田仲荘の預所として経済力にも恵まれていたと言われていています。外祖父(=母方の祖父)の清経は、今様や蹴鞠の達人で、遊里にも通じた数寄者として知られていたと言われていています。ですから、父親のほうからは左衛門尉みたいな武士の血が流れていて、母親のほうからはむしろ文化的なことの血が受け継がれたんだろうというふうに言われています。西行さんは武士を途中でやめちゃうわけですがけれども、「左衛門尉」っていうとこれは、父親も検非違使に就いたりしているので結構いいところまでいっています。エリートと言ってもいいぐらいで、例えば同じ時代に義経がいますが、義経がなぜ頼朝から怒りを買ったのかと言ったら、勝手に検非違使になってしまったからだ。検非違使は京都の検察とか警察をする職名ですがけれども、ですから西行さんも、義経と同じように最終的には左衛門尉とか検非違使くらいまでは昇れるようなところの人物で、ソコソコ偉いところまでいけるようなクラスの武士だったということです。

16歳のときに巨額の任料を納めて左兵衛尉に任官しています。やっぱり裕福なので、基本、金で官位を買えるようなクラスだということです。1137年(保延3)の20歳のころには鳥羽院の北面武士となっています。これ、結構可愛がられているっていうかですね、なぜかっていうと武士としての故実も知っているし、和歌にも優れていて、当然あとから歌人になっていくわけですから、そういうかなり教養のある人物として知られていたんだろうと言われていています。

ただ、1140年(保延6)に23歳で出家をして、以後「西行」と名乗るということになりますので、23歳で

このエリートコースをやめちゃうっていうことですから、これはやっぱり勇気のある決断だったと思います。資料の3ページ目ですけれども、「若くして出家し、人々を驚かせる」と。それでなぜ出家をしたのかってというのは、これはいろんな説が出されていて、ただどれも根拠がそれほどあるわけではないんですけれども、例えば人生の無常を感じて世を捨てたとか、あるいは恋愛で挫折をしたとかいうようなこともまことしやかに語られています。現在では、歌の世界に生きたいということで武士の道を捨ててしまったというような、やっぱり和歌の世界への魅力っていうことを言われることが多いかなと思います。

1141年(永治元)の24歳のころ、洛外に草庵を結んで修行に務める。翌1142年、25歳のときに藤原頼長を訪ねて待賢門院結縁の一品経書写をすすめた、ということが史料ではっきりしている。これはなかなか良い記事なので紹介しておきたいと思いますが、藤原頼長っていう人物はこの時代の本当にすごい人で、保元の乱のきっかけを作ったような人でもあるんですが、この戦いに結局破れた左大臣でして「悪左府」とも称されます。学問的にも政治的にも非常に切れ者として当時から知られていて、膨大な『台記』っていう日記を残しているんで、この人は男性に興味があるということでもよく知られているんですけれども。この『台記』の記事で、「西行法師来たりて云はく、…」と。西行さんが来て言うには、「一品経を行ふに依りて、両院(鳥羽院と崇徳院)以下、貴所皆下し給ふ也。」ということで、一品経というお経を勧進するために鳥羽院とか崇徳院とかいろんな偉い方からそういうお金を出してもらっていますと。「料紙の美悪を嫌はず、只自筆を用ゐるべし。余不軽承諾す。」とあって、不軽っていうのは不軽品のことで、いくつかある経典から私は不軽品というのを書くことについて承諾をしましたと。「又余年を問ふ。」だから私が西行さんにおいくつなんですかと聞くと、「答へて曰く、廿五(去々年出家、廿三)。」ですから、23歳のときに出家をして現在は25歳だと。「抑も(そもそ・も)西行は、本兵衛尉義清也(左衛門大夫康清の子)。」という註も付いている。「重代の勇士を以て法皇(鳥羽院)に仕ふ。俗時より心を仏道に入れ、家富み年若く、心に愁ひなきも遂に以て遁世す。」と。「人これを歎美する也。」とあって、やっぱり皆ちょっとびっくりしたようなんですけれども、非常にすばらしいことだと賛美を贈ったんだと。「家も富んでいる」だとか、当時の藤原頼長という一流の貴族がこんなふうに見ていたんだということがわかる、これは非常に良い史料になっています。

1145年(久安元)の28歳のときに、待賢門院璋子(たまこ)という人が没しています。これは直接関係ないんですけれども、ただ、待賢門院璋子は非常に西行と関わりのある人物でして、この待賢門院自体は白河院の後見を受けてその子どもの鳥羽天皇の中宮(=奥さん)になられた人です。それで、のちに崇徳院を生むので、崇徳上皇のお母さんでもあると。ただ、お父さんが鳥羽天皇なんですけれども、実際には崇徳院は白河と待賢門院との間に生まれた子どもだと世間もうわさしているぐらいですので、鳥羽天皇からはやっぱりちょっと、「崇徳は私の子じゃないんだ」というような認識もあって、かなりこの辺は複雑な関わりになっています。待賢門院はまた、西行が出家前に仕えた徳大寺実能の妹に当たります。ですので、西行が仕えていた家のいわばお姫様でして、17歳も年が上なんですけれども、ちょっとやっぱり懂れるような、非常に美しい人だったということもあって、西行から見ても一目も二目も置くようなお姫様だったということです。ただ、待賢門院はこの時点(1145年、西行28歳の頃)で、45歳で亡くなってしまうということになります。

1149年（久安5）の32歳のとき、この頃から高野山に草庵を結んでいます。それまでは京都の近郊で比較的に政治とも切れない関係にあったはずでしょうけれども、もう高野山に入ってしまうと都とは少し遠い関わりになると。高野山に隠遁して、しばしば吉野山に入ったりして、吉野の桜を愛でたりとかってというような歌を詠むことになります。

1151年（仁平元）、34歳のときに藤原顕輔撰『詞花和歌集』に西行の歌が1首、入首しています。「読み人知らず」にはなっていますけれども、西行の歌がこのとき初めてこういう和歌集の中に入ったと。この頃、和歌に精進をしまして多くの歌人とも交わっていたようで、高野山に行っても和歌はもちろん好きですから、こういう世界ともそれまでは関わっていたようですが、次第に、崇徳院が亡くなったり、自分の主家である徳大寺実能とか、公能とか、藤原成通といったような歌人たちが死ぬことによって、徐々に公家社会からも遠ざかっていく。基本的には高野山に居るので、そんなに頻繁な関わりではなくなってくるということになります。

1156年（保元元）、西行さん39歳のときに保元の乱が起こって、敗れた崇徳院が讃岐に流されていくと。崇徳院と西行さんは非常に深い関わりがあって、もちろん和歌で知った仲ですし年齢的にも近い。さらに待賢門院璋子という崇徳のお母さんとの関わりもあるので、崇徳院が保元の乱で敗れて仁和寺に駆け込んだときも西行さんが訪ねているようです。その崇徳院が讃岐に配流になってしまうと。そのあと、1159年、西行さんが42歳のときに平治の乱が起こって、1164年の47歳のときに崇徳さんが亡くなってしまふ。この讃岐の地で結局亡くなってしまふと、五色台の白峰で荼毘に付され、白峯陵に葬られることになる。いろいろ経緯はあるんですけども、最終的には、天皇陵が都以外で造られるっていうのは滅多にないことなので、「崇徳さんが怨霊になって世を乱してくるんじゃないか」というのがかなりまことしやかに言われたりして政治問題化もしたと。中世はそういうのをかなり深刻に受け止める社会、時代ですので、崇徳が亡くなったということ自体がかなり大きな話だったと思います。

1168年（仁安3）、51歳のときに、これはちょっと年代は諸説あり得るんですけども、基本的にはこの年でいいんじゃないかと思うんですが「四国へ修行の旅に出る」と。讃岐国の崇徳院の墓所に詣でて、院の怨霊を慰める。また、善通寺など弘法大師の旧跡を訪ねることもなります。その後、高野山の蓮華乗院を造営するための勧進を行ったりして、乗院の長日談義を始めるなど高野山の交流のために活動しています。だから、高野山のお坊さんとしての活動っていうのも結構長くされています。

1180年（治承4）、63歳のときに伊勢・二見浦に草庵を結んで、このときに和歌を通じて伊勢神宮の祀官の荒木田氏などと交わったりしています。西行は平清盛とも交流があるんですけども、清盛はこの年に64歳で亡くなってしまふと。つまりこの間は源平合戦のさなかなんですけども、西行はそれにそんなに深く関わることもなく、高野山とか伊勢とかといったところで過ごしていると。一線を画しているのは間違いないですね。1185年（元暦2）の68歳のときに、壇ノ浦の戦いで平家が滅亡するということになります。それで、源平合戦が一応の収束に向かうことになります。

1186年（文治2）の69歳のときに、東大寺が源平合戦で焼かれてしまふとこの頃なくなっているんで、その再建の勧進を頼まれて陸奥の平泉へ行っています。奥州藤原氏の一族とも西行は親戚になるので、そういう

絡みもあって奥州へ旅立つこととなります。途中の鎌倉で、源頼朝にも会っています。ですから西行もこの頃からそういうちょっとした名前を知られた人物であり、弓馬のことを教えてほしいとか、武士としての故実なんかも聞かれたりして「自分は全然、もう忘れてしまった」というようなことを言っているようですけれども、和歌についても語ったりしています。陸奥の旅から帰って、その後は京都の嵯峨に住んでいるようです。

1187年の70歳のときに『御裳濯河（みもすそがわ）歌合』という、自分の歌を対立させるような、当時流行ったような歌集を作ったりしていますし、配布資料の4ページですけれども、1188年（文治4）の71歳のときには藤原俊成撰『千載和歌集』に「円位」の名前で西行の歌が18首も入首して、歌人としてもこの頃には重んぜられるようになっていくことがわかります。1189年（文治5）の72歳のときには、河内国の弘川寺に草庵を結んで『宮河歌合』というものも作ったりしています。この年に奥州藤原氏が滅亡するので、源平合戦から始まった戦いの時代ってというのが、ここでひとつ、文治5年ぐらいで画期があるということです。

1190年（文治6）、西行は73歳のときに弘川寺で亡くなることとなります。これ、お墓とかは諸説あるんですけれども弘川寺で亡くなっていると。2月16日に亡くなっています。生前から歌を詠んでいて「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」というかたちで詠んでいたもので、「あ、やっぱり春に、望月の頃に亡くなったなあ」といって、2月16日っていうお釈迦さんの亡くなった翌日だということもあって、非常に人々を感心させた。往生したんだな、みたいなかたちで語られることが多いです。

1205年（元久2）に、藤原定家が撰した『新古今和歌集』に西行の歌が94首、最多のトップで入ります。これは新古今にかかわりがある後鳥羽上皇が非常に西行の歌が好きで、それで94首も入って、ここで和歌史における（西行の）位置が不動のものになっていく。その後の和歌の歴史から言うと、結構、技巧を尽くすようなかたちの歌が、まあ『新古今和歌集』自体もそんなタイプの歌集ですけれども、どちらかというと技巧を練ったようなものが好まれていきます。ですので、西行の歌は和歌の歴史の中ではどちらかというと素直な、技巧を尽くさないような歌っていう見做され方をしていくので、歌詠みとか俳諧とか連歌師とかいった和歌の正統な人からの評価よりはむしろ、一般庶民を含めた周りの文化人から高い評価を与えられていくということで現在にも至っているんだと思います。

このあたりが、西行さんがたどった生涯、歴史ということになります。一通りを見ていただいたんですけれども、特に今回「西行と善通寺」というお題をいただいているので、四国への旅について『山家集』から少し具体的に見ていこうと思います。

四国への旅の目的としては、よく言われるのが二つあって、一つは「崇徳院の墓参と鎮魂」。崇徳院とは非常にかかわりが深いので、その墓前に参りたいというのがあったんだろうと言われてます。もう一つが「弘法大師の旧跡を巡る」ということでして、いろんな論者がふれているところでは、どっちかに比重があったりとかっていうふうに言われるんですが、基本はこの二つが目的としては挙げられていると。（配布資料には）「※詞書と歌」と書きましたけれども、西行さんの歌と、その前にちょっと歌の解説をしてくれる詞書というのを入れています。非常に長い詞書があったりすることもあるので、これを読むことによって歌だけ



じゃなくてその背景とかの理解にもつながっていきます。(配布資料のなかでは)基本、和歌については文意というか、意味まで書いているんですけども、詞書の文意はちょっと時間がなくて書けなかったので、ざっと読みながら。どちらかというと、今回は雰囲気を感じてもらえたらいいかなと。案外、私もそんなに西行の和歌を研究しているわけではなかったのですが、驚いたんですけども、かなり数があって、有名なところは私も知っているんですけども、こんなに四国の旅で詠んでいるんだっていうのは率直に驚かされました。数でいうと30ちょっとぐらいあるのかな。それで、詞書もまあまあ長くて、これも文学作品として読めるようなところもあるので、少しご紹介したいと思います。

まずは「出発に先立つ賀茂社への参詣奉幣」ということからこの旅は始まります。その下に「(1)」って書いていますけれども、こちらのほうが詞書。詞書は括弧づきの数字で、歌は「①」とかマルのついている数字とお考えいただいたらと思います。それで見ると詞書がない歌もたくさんあるんですけども、基本、詞書があって、その次に歌があるというかたちになります。

(1) ですけども、「そのかみまいりつかうまつりける慣(なら)ひに、世をのがれてのちも、賀茂にまいりけり、」とあります。「そのかみまいりつかうまつりける慣ひ」というのは、要は(西行が)出家する前ですね、出家する前はお参りするのが習慣になっていて、「世をのがれてのちも…」っていうのは出家した後もこの賀茂社に参っていますということです。この文章から、つまり西行さんが出家の前も後もずっと賀茂社を信仰していたということがわかる。つづいて、「とし高くなりて、四国のかたへ修行しけるに、また帰りまいらぬ事もやとて、仁安二年十月十日の夜まいり、幣まいらせけり、」ということですけども、四国へ修行に行くので、また帰ってくることももうできないかもしれないから、この仁安2年の10月10日の夜に賀茂社に行きましたと。「内へもいらぬ事なれば、たなうのやしろ…」っていう神社があって、そこに「取りつぎて、まいらせ給へとて、心ざしけるに、このまの月ほのぼのに、常よりも神さび、あはれにおぼえてよみける。」と。それがこちらの歌、①ですけども、「かしこまる四手(しで)になみだのかかるかな又いつかはと思ふあはれに」この文意としては、恐れ多くも賀茂の神に奉る四手、四手っていうのは玉串につけているものですけども、そこに涙をこぼしてしまったと。これから遠い修行の旅に出て、またいつ参詣できるかわからないと思ったら感極まるものがある、その哀れさのためだ、というふうに感想を漏らしています。出発の年次については、実はこれ、本によって仁安2年説と3年説というのがあるんでこんなふうになっています。歌が詠まれた10月10日の参拝直後に西行は出発しています。だから京都から出発しているということになります。その後のコースとしては京都、摂津、播磨というかたちでだんだん四国へ近づいていきます。

(2) ですけども、「西の国の方へ修行してまかり侍りけるに、みづの(美豆野)と申所に具しならひたる同行の侍りけるが、親しきものの例ならむ事侍とて、具せざりければ」という詞書のあとに、②の歌「山城のみづの水草(みくさ)につながれて駒物うげに見ゆる旅哉」とあります。ここはちょっと説明を足さないとわかりづらいんですけども、西行さんは「西住さん」という親しい友人と、一緒に旅に出ようとしています。文意ですけども、山城国にある美豆、これは地名ですけども、美豆の御牧の牧草に心ひかれるご

とく西住さんが親しい者の病気という俗縁に心ひかれて旅に行けぬので、牧草にひかれて駒が旅行くことに心進まぬごとく、私も心が進まない旅ですよというようなことを言っています。西住さんは途中で合流していて、だけど結局帰ってしまうので、四国には西行さんが一人で渡ってくることになります。恐らく京都からですので淀川を下って美豆野に入って、その後、摂津、播磨へと行くんだらうと思います。配布資料の5ページ目にも書いていますけれども、ここの「具しならひたる同行」っていうのは西住っていう人のことになります。しばらくはこのあとの話にも出てきます。

(3) 「津の国にやまもとと申所にて、人を待ちて日数経ければ」、③「なにとなく都のかたと聞く空はむつまじくてぞ眺められける」とあります。歌の意味自体はそれほどのことはないんですが、何ということなく、都の方はあちらの方だと聞いて見る空は、親しみをもって眺められたことであるよというような意味です。「津の国」「やまもと」っていうのは、摂津国山本でして、これは現在の兵庫県宝塚市のあたりを通過していたことになります。

それから(4)ですけれども、「播磨の書写へまいるとて、野中の清水を見ける事、一昔になりけり、年経てのち、修行すとてとをり(通り)けるに、同じ様にて変らざりければ」っていうことで、これは、一度こっちのほうに来たことがあって、またもう一回来ていますという話です。④ですが、「むかし見し野中の清水かはらねばわが影をもや思出らん」歌の文意としては、昔見た野中の清水に久しぶりで来てみたが、その様子は少しも変わらない。野中の清水も私の姿を思い出してくれるだろう、と。最初の詞書にあった「播磨の書写」っていうのは、これは播磨国の書写山円教寺という天台宗の大きなお寺です。兵庫県姫路市の山の上にあるんですが、西国巡礼の札所のひとつで、一番西の端に位置している札所になります。多分そういうついでもあって、西国巡礼の札所も巡って、それから四国に入ってくるんだらうと思います。

(5) 「四国の方へ具してまかりたりける同行、都へ帰りけるに」、⑤「かへりゆく人のこころを思ふにも、離れ難きは都なりけり」とあって、これもあの西住さんの話でして、意味としては都へ帰る君、西住の心を想像してみると、切るに切れないのは同行の私との仏縁ではなくて、やはり都との血縁のほうだったねとちょっとなじるような、西住さんと一緒に行きたかったのにとというようなことを述べる歌になっています。

(6) 「ひとり見をきて、帰りまかりなんずるこそあはれに、いつか都へは帰るべきなど申ければ」、⑥「柴のいほのしばし都へ帰らじと思はんだにもあはれなるべし」と。この柴の庵に一人とどまって、しばしの間は京に帰らないでおこうと思うだけでも物寂しく哀れなことだろうと、都を離れる不安な気持ちを詠んでいる。このあたり、実は『山家集』っていうのが結構ばらばらに入っているんで、年代とか順序を見極めるのが非常に難しく、配布資料に記載した年代はある程度『古典文学大系』という本から取っているんですが、一連の数字がずっと続いているものもあれば、ちょっと切れているものもあって、大体時代がわかるものもあるんですけれども「え、これは大丈夫なの？」っていうのもあるので要注意なんです。

ここから岡山県のほうに入っていきます。備前国児島から真鍋島という島に渡るくだりがあります。

(7) 「西国へ修行してまかりける折、児島と申所に八幡のいははれ給ひたりけるに、こもりたりけり、年経て又そのやしろを見けるに、松どもの古木になりたりけるを見て」ここも一度、西国に修行をしにきたときに一回は来ているんですけれども、またもう一回来ましたよと。それで、⑦「むかし見し松はおい木に成にけり我年経たる程も知られて」と。「おい木」って老木のことですが、「我年経たる程も知られて」ということで、昔、私の見た松も老木になってしまった、私が年を取っていたことも自然とよくわかったというようなことを述べています。「児島」は香川県の対岸のあの児島ですけれども、そこまで来て、ここからどうやって行ったのかっていうのが、(学説的に)結構いろいろと意見が分かれたりするんですけれども、それを踏まえて整理してみるとこんなふうになるのかなというところです。

配布資料の6ページ、(8)ですけれども、「備前国に小嶋…」字はちょっと違いますけれども、「小嶋と申島に渡りたりけるに、あみと申物採る所は、」この「あみ」っていうのは小エビに似たちっちゃいエビでして、佃煮とかに使ったりする生き物です。「あみと申物採る所は、をのをのわれわれ占めて、長きさほに袋を付けて立て渡すなり、そのさほの立て始めをば一のさほとぞ名付けたる。中にとし高き海士人の…」いまでも海女さんっていいですけども、だからこれは男性なのかもしれないです。「海士人の立て初(そ)むるなり。立つるとて申なることばきき待しこそ、涙こぼれて申ばかりなくおぼえて、よみける」と。その歌が⑧「立て初(そ)むるあみ採る浦の初さほは罪の中にも優れたるかな」このあたりは瀬戸内海の光景を詠んでいる歌でして、あんまりこういうものを西行さんは見たことがないので、率直に驚いて、それがちょっと罪の意識の話と結びついてくるんですけれども。文意としては、アミという小エビに似たものを取ることを生業にしている漁村では、たくさんの収穫をめざして最初の竿を神仏に祈るようにして重々しく立てているが、考えてみれば、こうしたことは罪の中でも重いものだろうと。結局、これは殺生してしまうので、生業として魚を獲ったり小さい生き物を獲ったりっていうのは、漁村とか漁師さんはやむを得ないわけですけども、それはでもやっぱり罪の中でもなかなか軽くなって、「重いものだな」というような感想を漏らしている。西行さんは真言宗のお坊さんでもあるので、そのようなことも述べられていると。

(9) 「日比(ひび)・渋川と申す方へまかりて、…」、「日比・渋川」はあまり聞いたことがないかもしれませんが、配布資料の裏表紙をちょっと見ていただいたら地図が載っています。児島自体が昔、島なので新田開発が中世～近世ずっと行われて、今はもう埋まってしまっていますけれども、倉敷のあたりとか雨が降ったら結構大変なことになったりするのはいっぱいこの辺が遠浅の海だったので、まあ、今でこそつながってしまいましたけれど。児島のちょっと下側に渋川、日比っていう地名がある。左側に瀬戸大橋線が児島から坂出まで通っていると思うんですが、その右側のちょっと上のほう、玉野とか宇野とかっていうあたりに日比、渋川っていう地名がある。日比、渋川から大槌、小槌とかを通っていくと、本当にすぐ五色台に行き着く。多分この経路が一番距離的には近くて、瀬戸大橋を通すときもこのルートは考慮されたとかっていいます。ただ、地盤が砂地のような弱い場所だったので結局はルートに選ばれなかったようですが、本当にやっぱり目と鼻の先にあると。ここまでは、つまり日比とか渋川というところまでは、牛窓とかそういうところから海上交通で来ているのかもしれない。(9)ですが、「日比・渋川と申す方へまかりて、四国の方へ渡らんとしけるに、風悪しく程経けり、渋川の浦と申所に、おさなき者どものあまた物を拾ひけるを問ひけれ

ば、つみと申物拾ふなりと申けるをききて」で、⑨の歌「をり立ちて浦田に拾ふ海士の子はつみより罪を習ふなりけり」と。「つみ」っていうのは、ツブ貝のことです。浦田に降り立ってツブ貝を拾っている漁師の子たちは結局このつみによって殺生の罪を習っているようなものである、非常に悲しいのだけれどもこういう生業上しょうがないよねというようなことを詠んでいます。

(9-1) 「真鍋と申嶋に、…」真鍋は真鍋島。先ほどの地図だと、塩飽諸島があって、その一番左側に佐柳島とか真鍋島という、ご存じかもしれませんけれども、そこへ渡っていくようです。これは結構離れていて、もう目と鼻の先に五色台があるのになぜ行かないのかっていうのが素朴に思うんですけども、どうやら船がこの船しかなかったのか、真鍋のほうに行っているんです。「真鍋と申嶋に、京よりあき人どもの下りて、」商人たちが下って、「ようようの積載の物ども商ひて、又塩飽の嶋に渡り、商はんずる由申けるをききて」そして⑨-1「真鍋より塩飽へ通ふ商人（あきびと）はつみをかひにて渡る成けり」とあります。真鍋島から塩飽諸島に通う商人は、罪深い積荷を買いつけては航海しているので、人々に罪を犯させる張本人のようなものだというような、お坊さんらしい歌を詠んでいて、ここでいう真鍋島は岡山県笠岡市の塩飽諸島の西端に位置する小さな島。西行は真鍋島を經由して三野津へ向かう下り船に乗ったんだらうというのが最近の説になっています。三野津って詫間とか三野のあたりで、今でこそ新田開発で埋め立てられたりしていますけれども、ちょっと台場になっていて、この頃は港として使われていたので恐らく詫間の塩を都のほうに送ったりするのに真鍋島を經由していたんだらうと思います。

(9-2) 「串に刺したる物を商ひけるを、何ぞと問ひければ、蛤（はまぐり）を乾（ほ）して侍なりと申けるをききて」、⑨-2「同じくは牡蠣をぞ刺して乾（ほ）しもすべき蛤よりは名もたよりあり」とあります。同じ罪を犯すのなら牡蠣を串に刺して乾かしたい。海の干し柿、なんてね。蛤も栗なら罪はないけれど。これ、駄洒落のようなことを言っていて、牡蠣だと生き物ですけども果物の柿やたらいいよねとか、蛤だったら生き物だけれども栗なら罪はないですよっていうことを、ちょっと遊び心も入って詠んでいる歌になっています。

(9-3) 「牛窓の瀬戸に海人の出いりて、さだえと申ものを採りて舟に入れ入れしけるを見て」、⑨-3「さだえ棲む瀬戸の岩壺求め出でて急ぎし海人の気色成かな」とあって、サザエの棲んでいる海峡の岩のくぼみを見つけ出しては潜ったり、船に投げ入れたり忙しい海女の様子が面白かったというような、このあたりまではずっと瀬戸内海の光景を詠んでいる。特に、漁師たちとか海女の動きには関心を持っていることがわかります。結構新鮮だったようです。

(9-4) 「沖なる岩に着きて、海人どもの鮑（あはび）採りける所にて」、⑨-4「いはの根にかたおもむきに並み浮きて鮑をかづく海人のむらぎみ」沖の岩の根元にすがりつくように、何人もの海人が同じほうに顔を向けて並んで波に浮いている。一途になって顔の向きをそろえているのは鮑の片思いのようだと思ったが、果たして老練な海人が海に潜って採っていたのは鮑だった、というような瀬戸内海の光景を詠んでいる。

ここから讃岐の国へ入ってくることになるんですけども、以下⑩⑪⑫っていうのは結構有名な歌です。まず(10)ですが「讃岐に詣でて、松山の津と申所に、院おはしましけん御跡尋ねけれど、形も無かりければ」、⑩「松山の波に流れて来し舟のやがて空しく成にける哉」と。「松山の津」っていうのは国府、今の府中の北側にある津なので、五色台とかこっちのほうで今は埋め立てられて陸になっていますけれども、雄山、雌山と言われるあたりはずっと海の水が入ってきていたので、あのあたりが松山の津と昔言われた国府の端末なんです。つまり西行さんは、まずは三野津から、いわゆる詫間のほうから入って、しかしそこから陸で行っているのか海で行っているのか。今では、南海道で陸路を来たんじゃないかというようなことを言われていますけれども、まず行くのは松山の津から崇徳上皇のところに行く。松山の地に配流された崇徳院は、帰京の悲願も空しくそのまま当地で亡くなられてしまったのだなという歌です。

⑪「松山の波の景色は変らじを形無く君はなりましにけり〈詞書なし〉」松山の津は昔と変わらず、崇徳院のお住まいの頃をしのぶことができそうだけれども、肝心の院はもうこの世におられないんだなと。

⑫が最も有名な歌ですけれども、(12)「白峯と申ける所に御墓の侍けるにまいりて」、⑫「よしや君昔の玉の床とてもかからん後は何にかはせん」崇徳院の御霊よ、昔は玉の床におられたが、このようにお亡くなりになった後は、これが何になるだろうかと。あの世でもう成仏してくださいよというような歌を、鎮魂の歌を詠んだというのがこれらの三つの歌でした。

そのあと、(13)ですけれども、「讃岐の国へまかりて、みのつ(三野津)と申津に着きて、」、「着きて」とあるので多分これは船で行っているのだと思います。「月明かくて、ひびの手も通はぬ程にとほく見え渡りたりけるに、水鳥のひびの手に付きて飛び渡りけるを」この「ひび」っていうのはちょっとわかりづらいと思いますが、これは海中に竹や木を立てて囲いを作って魚を取る設備があって、それが海上から出ていて、水鳥たちがその上へやってくるっていうような歌を詠んでいます。

このあと、(講演の)時間もそんなにないので、ずっとまだ歌があるんですけども、案外松山の津で詠んでいる歌っていうのは有名で、私も結構そらんじられるぐらい何度も読むんですけども、実はこの三つしかないっていうことも重要なんです。(四国へ来て)まず崇徳院のところに行ったっていうのは、それはそれで、やっぱり旅の目的がここに一つあったんだなというものもあるんですが、ただ、歌の数から言うと圧倒的に善通寺周辺で詠んでいるのが多いっていうのも、これもちょっと考えておかないといけないのかなと思います。

配布資料の7ページの下の方「善通寺周辺における和歌」。「人里から隔絶し、人との交わりを断った孤絶の生活を西行は送ろうとしていた。」今は夏で暑いときで、想像がつきにくいかもしれませんが、これは雪の山中での修行のことです。当時と今とでは気候もだいぶ違うので、一概には言えないですが、雪がかなり積もっているような状況をたくさん詠んでいる。

(14)ですけれども、「同じ国に、大師のをはしましける御あたりの山に、いほり結びて住みけるに、月いと明かくて、海の方曇り無く見えければ」、⑭「曇りなき山にて海の見れば島ぞ氷の絶え間なりける」曇りのない山から海に照る月を見ると、一面の海が氷のように白く美しく見えて、島は氷の絶間になっていることだと。つまり結構、島々が見える、それから海が見えるっていうような場所を選んでいうこと

がわかります。

(15) 「住みけるままに、いほりいとあはれにおぼえて」、⑮「今よりはいとほじ命あればこそかかる住まひのあはれをも知れ」と。今から後は、この俗世を嫌がることをやめよう、命があればこそ、こういう山のいおり住みの哀れをも味わい得たのであるというようなことです。この草庵がかなり気に入って住んでいたんだなと。

(16) 「いほりの前に、松の立てりけるを見て」これが実は今日の講演の最初に扱った歌でして、⑯「久に経てわが後の世をとへよ松跡忍ぶべき人もなき身ぞ」。実際に『山家集』に入っている歌が最初にお話した『南海流浪記』にも採られていて、人口に膾炙して広まっていたんだということがわかります。文意でいうと、大師同様に永遠の命を生き続けて、私の後世を弔っておくれ、松よ。私は大師のあとを慕ってここまで来たが、私をしのんで来るものは誰もいないのだからと。これなんかはもう、結構、西行さんは自分のあとをしのんで来ることを狙って言っているようなふしもあって、なかなか西行さん、一筋縄ではないような気はしますけれどもね。

⑰「ここをまた我住み憂くて浮かれなば松は独にならんとすらん〈詞書なし〉」私は一所不在の遁世生活なので、こんなに住み心地のよい草庵もやがて住みづらくなって出ていこう。そうしたら、松はまた一人になってしまうのだろうか、っていうような松の歌、結構たくさん詠んでいますし、この草庵生活もなかなか気に入っているようなふしがあって、その辺は心情がちょっとわかるような歌。

⑱以降は、実はこれは雪の草庵風景がずっと続いていて、これはこれで味わい深い。ただ、情報はなかなか得づらいところがあって、これはちょっと読んでいただくだけでいいかなと。雪の風景をたくさん詠まれているってこと自体は案外気づきにくいので、こうやって資料にしていくと「あ、こんなに詠んでいるんだ」というのがわかります。⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖と、ずっと雪の中の生活とこの草庵での生活ぶりを詠んだりしています。

配布資料の9ページの最後、㉗ですが、実はようやくたどり着いたところです。「庵を営む前に、弘法大師ゆかりの善通寺の誕生所に参詣し、我拝師山に登ったか」これは私が作った文章なんですけれども、これは順番から言うと、先ほど言った雪の中のいおりの生活が歌に詠まれているんですが、多分善通寺から参って、そこから隔絶した草庵での生活に入るのかなと思います。それで㉗が、これが善通寺。名前は実は出てこないんですが善通寺の歌だと思います。(27)「大師のむまれさせ給たる所とて、めぐりの仕廻して、そのしるしに松の立てりけるを見て」、㉘「あはれなり同じ野山に立てる木のかかるしるしの契りありける」深く感動してしまいました。同じように野や山に生えている木でありながら、この松だけは大師誕生を記念して特別の目印がつけられるとは、それ相応の仏縁がそもそもあったんだろうなと。「善通寺」という言葉は出てこないんですが、「大師のむまれ(生まれ)させ給ひたる所」とあるので、これは大師誕生所の、善通寺の誕生院は実はまだこの頃なくて多分その印に松が立っていたんだと思いますので、そこを訪ねていると。

それで、㊸が又ある本に、「曼荼羅寺の行道所へ登るは、世の大事にて、手を立てたる様なり。」すごく急峻な、手を立てたような断崖だと。「大師の、御経書きてうづませをりましたる山の峯なり、坊の外は一丈ばかりなる壇築（つ）きて建てられたり。それへ日ごとに登らせおはしまして、行道しをりましたり、申伝へたり、巡り行道すべき様に、壇も二重に築（つ）まはされたり。登る程の危うさ殊に大事なり、構へて這いまはり着きて」もう這い回って。つまり、あの捨身ヶ嶽へ行かれた方はもう大変な思いをされたことだと思いますが、これはやっぱり這って、弘法大師がやったように西行も行ったんだろうと。そして㊸「めぐり逢はん事の契りぞありがたき厳しき山の誓ひ見るにも」大師が師と頼む釈迦如来にここでお会いになったという仏縁が、今もそのまま受け継がれていると頼もしく感じた。巡り行道の修行の厳しさは大師の捨身をさながら見るようであると。ここの詞書は結構、そのまま読んでも、何かすごい大変な思いをしている西行さんの様子が伝わってくるようです。

(29-1) 「やがてそれが上は、大師の御師に…」、「御師」はここでは釈迦如来ってということですが、「御師に逢ひまいらせさせをりましたる峯なり。わがはいしと、その山をば申すなり、」我拝師山のことですね。「その辺の人はわがはいしとぞ申ならひたり、」地元でもこんなふうに呼んでいるんだと。「山文字をば捨てて申さず。又筆の山とも名付けたり。」これは実は誤解でして、西行さんはこれを筆ノ山だと思っているんですが実は違う。我拝師山です。「とをくて見れば筆に似て、まるまると山の峯の先の尖りたる様なるを申ならはしたるなめり、」、「まるまる」っていう表現はあの辺の山々を表現している（「まる」は、まるい。ふっくらしている。の意）んだろうっていう感じですが、「行道どころより、構へてかきつき登りて、」っていうのも、しがみついている様子が表現されているんですが、「峯にまいりたれば、師にあはせをはしましたる所のしるしに、塔を建ておはしましたりけり。塔の礎（いしずえ）、計りなく大きなり。」と。今はないんですけども、これはどうも塔があったようです。「高野の大塔などばかりなりける塔の跡と見ゆ。」と。でももうだいぶん、もう江戸時代にはなくなってしまっているんですが。「苔は深くうづみたれども、石大きにして露（あらは）に見ゆ。筆の山と申名につきて」、そして歌㊸-1「筆の山にかき登りても見つるかな苔の下なる岩のけしきを」我拝師山に登ってみました。筆ノ山というだけあって、これはだから西行さんの誤解なんですけども、筆で書くように、搔き登る、岩にしがみついて登ることになった。するとそこには大塔の礎石が苔の下に埋まっていて、その大きさが大師の慈悲の大きさを語るようだったと。また、最後の詞書が珍しいんですが、和歌のあとに詞書で若干の解説をしてくれている。いわゆる善通寺御影というか、弘法大師の像に釈迦如来が山裾から見える、っていうのが善通寺独特の弘法大師の描き方ですけども、そのことにちょっとふれて書いてくれています。

ということで、もう時間もきているようですので。和歌群、一つ一つはなかなか吟味しながら読みきれないところもありましたけれども、これだけまとまって残っていて、松山の津は重要な句として有名ですけども、案外この善通寺周辺で詠んでいる歌が、やっぱり草庵生活の歌が詠まれている。この街を西行さんが気に入ってくれたんだなというのがよくわかる歌が残っていて、最後はやっぱり、弘法大師空海のあとをしのんで修行をするっていうことが本当に喜びだったんだな、というのがわかる句になっていると思います。

終わりにですけれども、西行のイメージとか旅の検証、案外善通寺のことを書いていないというのが結構な驚きなんですけれども、一方で弘法大師の誕生所のことはふれている、このことが何を意味するのか。ですから、西行さん自身の思いと、あとから西行さんを慕って善通寺に来る人の思いっていうのが、もちろん善通寺の働きかけもあるのかもしれませんが、イメージがどんどん広がって深まって、善通寺と西行さんがセットになっていくっていうのが中世の善通寺の寺としての展開であったり、取り巻く社会の動きなのかなというようなことを、今回ちょっと整理していたら、そんなことも思ったような次第です。すいません、ちょっと長くなりましたけれども、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。